
うそつきなおふたり

しらすぼし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うそつきなおふたり

【Nコード】

N4594E

【作者名】

しらすぼし

【あらすじ】

私のお隣はいつも一日彼女を侍らせています。わたしは好奇心から彼の修羅場へと足を運んでいます。なぜ、彼はいつも一日限定のお付き合いしかしないのでしょうか？

うそかほんとかすらわからないきみ(前書き)

このお話は一話完結のシリーズになるかと思われます。

うそかほんとがすらわからないきみ

たった今、初めて足がすくむことの意味を実感した。
逃げたくて、逃げられない。

こつも現実にあつさりと飲み込まれるとは思わなかった。
もつと世界は自分に甘いものだと思つてた。
少なくとも今が来るまでは、とても甘かった。

不愉快な音が聞こえてきます。ああ、今日もか。初心者が扱うヴ
アイオリンのような、耳につんざくような叫び声に起こされました。
おまえはそれでも人間なのか！楽器になれ、なりたいんでしょ？

それは言いすぎとして、私は今日も興味本位で中庭で行われる醜
い愛憎劇場へと足を運ぶのです。閲覧者1名、遠山美月^{えんざんみつき}。放課後わ
ざわざ10分くらい教室でお昼寝している理由がこれ。べつ別に眠
たくていつのまにか寝てしまつてるとかじゃないからね！ごめんな
さい。

今日は何が原因だったのでしょうか。といつてもいつも同じだった
と思います。

「どうして今になって付き合えないなんて言うの!？」

「・・・耳が腐る。」

「そんなつ・・・ねえ。答えてよ、ハル君！」

「聞かないほうがいいんじゃない？」

「でもっ、教えてくれるまでは別れない。」

現在修羅場に最も近い樹齢100年の木からののぞき中。いままでバレタことがあります。声も立てず笑いをこらえひっそりと耳に全神経を注ぎ聞き入っているからでしょう。いつのまにか楽しくて私の放課後の日課になっていました。この修羅場は週2、3回とても見目麗しい遊び人を好きな人によって練り広げられております。本当に遊び人なのかは不思議です。いや、世間では遊び人というケテゴリにぶら下がっているとかわるのでやはり遊び人です。その隣にいるのはたぶん彼女？かもしれない。いや、でも双方がそう言ってるだろうから、どんなに周りが疑問に思ってもそうなのでしよう。

こんなにも説明があいまいで長くなる理由、それは彼の人間性にあります。それはまあ、説明すると長くなるのですが順を追って説明しましょうか。まず、ってこんなことをしている場合ではありません！

視線、そう凍てつくばかりの視線が得あたしの背中を襲っています。現在進行形で！！えっどうしよう、どどどどうしよう、否落ち着け。これは厳格操作によるものだ。今までそんなものなかったじゃ・・・そう、脳内で試行錯誤しているときに聞こえていた声。あっ目が合った・・・

「ふう。じゃ、教えてあげるよ。仕方ない・・・おいで、美月。」

あつ私呼ばれました？なんで呼ぶのー！スルーでしょうそこは。うわっものすごい勢いで彼女さんが振り向いた！怖い、あれは般若だ。普段のブリッ子からは想像もつかない。しかしこの完璧な隠れ

みの術が通用しない相手が現れるなんて。ヤバい。・・・逃げる！
！！っと思っっちゃっただけです。もちろん無理ですよね。目の前には元凶の男子さん、遠山春雅とくやまはるがさん。今日も惚れ惚れするほど見事な顔立ちです。美人は3日で飽きるはずなんですけどねえ。

いやあ、ご丁寧に迎えに来てくださって・・・迷惑です。

脳内でくだらない現実逃避をしているうちに逃げていればよかった、そしたらこの人と私が交わる理由が見つからずに済んだのに・

「ばれてないとも思った？バレバレだったよ。まあそんな難しい顔しないでちょっとついてきて。すぐに終わるからさ。」
そう小声でおっしゃいました。明らかに悪いのは私でした。上記のはただの出来心でした・・・しかし、否だからついていきました。もちろん嫌なことが起こることくらい理解して。

「・・・これ、何？」

彼の後ろでこそそとついて来た私をひと睨みし、開口一番にそうおっしゃいました。彼にすぎるような湿らせた瞳を向けて。いやあ、みなさん聞きました！？今の言葉！私人間以下らしいです。ちよつと、いくら月とすっぱん並だからってそれはひどいですよ。ム力つくなあ。最後に言っておきましょう、私は努めて冷静でしたよ。嘘です。と、まあひそか（あきらか）に怒りに身を滾たがらせていると、

「こちらは昨日君とやった後すぐにできた次の彼女。かわいいでしょ？美月ちゃんだよ。」

「はっ!？」

バシッ!!!!

てっ
」

い

状況を説明しましょう。彼氏さんの彼女が私にズカズカと近づいて私の前に来たかと思うと私の頬をものすごい勢いでしばきました。思考が彼の言葉で停止していたとはいえ、しつかりと痛みは脳に届きましたよ、まさに火事場の馬鹿力……泣いてもいいですか？

「信じらんない、最っ低。この雌ブタ。あんた明日覚えてなさいよ!」

そうつぶやいて颯爽と歩き去って行きました。えっ怖っ、怖!悪いのは私なんですか???

どんなに理解していても体が付かないもので、動けません。なんとなく混乱していたらしく、しばらくただ呆然としていました。

すると彼のほうから

「ごつめんねー迷惑かけて。ちょっといつもと違ったシチュエーションを体験したくてさー。まっ毎度の閲覧料だと思ってさ。」

この人最低だ。彼はそう言って私と視線を合わせるように屈んだ。

「ほっぺ大丈夫?」

「あっはい。私こそ毎回楽しんでてごめんなさい。」

「やっぱり君だったんだー毎回。ホント、

君最低。……

なんてね！」

一瞬の出来事でした。

私はまた囚われてしまいました。

あなたの目に映ってしまいました、私が。

「君最低」そう言った時のあなたの目は鏡と同様に、私が映されて
いました。

つまり、あなたの心に私の存在が届いてないのです。

「……ごめんなさい。」

「いやー僕悪い子だからそこまで謝らなくていいよ。」

「ああ、ご自分で気づかれてたんですか。」

「え？」

「ごめんなさい。」

私弱いなー

「ん、じゃあいつしよに帰ろっか。」

「彼女は？」

「今日はいなかったんだ。なんかさっきの子ってこの学校で一番かわいい子らしくてさ、今回は続くんじゃないかってうわさがあったらしいよ。ま、そんなわけないけど。」

どうやら帰路の方向が同じなのでなんとなく、嘘です。ここ最近ずっと気になったことがあったので一緒に緒させていただきました。

「君って意外にしゃべれないんだね。」

あー！！今話しかけようとしたのに。うまい具合にタイミングを逃しました。

「いえ、ずっと話しかけようとしてたんですよ。」

「知ってる。そんな顔してた。」

クソヤロウ

「ん？・・・帰り道とかいつつも女の子一人で喋っててね、だからこんな沈黙初めてだったんだ。さ、どうぞ。答えるかどうかは置いてなんでも聞いていいよ。」

「えっ、答えてくださいよ。」

「否、スリーサイズはちょっと・・・」

「無視します。じゃあ聞きます。どうして、やり逃げするんですか？」

「一日で飽きるからっ。」

「どうして一日で飽きるなんて、嘘をつくんですか？」

そう問うと、彼は少しだけ黙ってこうおっしゃいました。

「・・・初めは、いいよって答えた時は別れようなんて考えてないんだ。ただね、

「なんだよ。」

「・・・そうですか。」

そう、答えるしかありませんでした。同情も嫌悪もなくただ私の心は空っぽになりました。ただあなたはその言葉をふさいだあと、やっと私に気付いてくれました。その時彼の心に私は存在しました。

「僕のこと、好きでしょう。」

あなたが私の心を手取るように分かっているのは当たり前です。私はそこに嘘を取り入れておりません。少しでも正直でいたいです。

「はい。」

「好きになったのって僕が君を呼び止めた時？」

「・・・いいえ。大好きです。」

そう、私が答えた時の彼の表情はうつとりするほど魅力的でした。そして、そのまま彼の唇は私のと重ねました。ただ、触れるだけでした。

そういえば私は何に惹かれたのでしょうか？今まで一度だって誰かを好きになることはありませんでした。あなたは初恋の人。しかしあなたはあまりにも危険な香りを漂わせていました。だからなのでしょう、きっかけはそこ。

「僕はね、今、君のことが死ぬほど好きで、殺したいほど嫌いだよ。それって結局はどうでもいいってことなのかな？二つがぶつかって、今「無」になったんだ。」

「あーあ、泣かないで。悲しくなくせに。」

「悲しいんですよ、純粹に両想いになれなくて。・・・ひとつだけいいですか？」

「どうぞ。」

「どうして、私とは一日も恋人にならなかったんですか？」
さあ、答えて。私も言ってやる。」

「だって君は僕と友達の方がいいんじゃないっ？」

「わあ、すごい。」

「へへーん、読めましたよ。さっきのあなた。」

「ありがとう。じゃ、また明日。そうそう、聞いたそうにしてるから答えてあげる。どうして僕が君の名前を知ってるか。君、僕のおとなりでしょう？席。遠山美月ちゃん。あと、敬語はやめようよ。同じ年でしよう。」

「もう一ついいですか？」

「うん。」

「彼女たちに悪いとは思わないんですか？」

「全然思わないよ！じゃあね。」

うーん、やはりあなたは未知数です。

さっきの答え、ホントかウソか分りかねました。

彼女たちの代わりに彼を殴ってあげようとも思いました。

それでも私は嘘だと思えます。

人間、不思議な生物です。

しかもあの人フェミニストじゃありません。

私送ってほしかったなあ。

出来心でした・・・・・・・・・・・・・・・・本当は、ずっと好きでした。

これから嘘をついていくことになるんでしょ。

今だけ言わせてください。愛しています。だからずっと近くに居させてください。たとえそこにどんな感情があったとしても。

何にも気付
かない、ずっとだまされているふりをする。そうでもないところにい
られない。

うことがあると思いますか？

ふたりの感情が交じり合

．．．明日を考えると登
校拒否したくなりました。あと、
なんであんなはしはかれなかつた
んだ！！！！

うそかほんとかすらわからないきみ（後書き）

御気分を害されたなら心よりお詫びします。

誤字脱字や感想等（中傷等以外）ありましたら是非お願いします。

作品評価をしていただけるならとびはねます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4594e/>

うそつきなおふたり

2010年10月9日00時47分発行